

持続的循環型社会構築と里地里山ツ - リズム

系長浩司

日本大学生物資源科学部教授

2003年度

1. 持続的循環型社会構築と里地里山の意義

1) 持続的循環型社会構築と農村ツーリズム

循環型社会構築が国家的目標となってきた。持続性をテーマとした循環型社会構築である。20世紀型、西欧近代的な都市社会建設の限界性に直面し、非持続的、非自立的、非循環的な都市的暮らしをどう再構築、脱構築していくかが問われている。その解決の方向として、より持続性と循環性のある農的暮らしが再評価されてきた。伝統的な農村地域での暮らしの再評価である。一方でこれは、近代的生産第一主義で進めてきた近代農業の見直しも同時に必要としている。

一方で農村社会は都市的な暮らし、都市的な居住環境に近づくことを至上目標として開発と整備が近代化の中で進められてきた。地球環境・循環社会時代に至り、近代化以前の暮らしの意味や価値、農村地域における自然、農林業環境、農村文化、農村風景の価値の見直しが起きてきている。このことは、農村ツーリズムの方向を考える上でも同様である。バブル期の大型リゾート開発に対する、手づくりリゾート、グリーンツーリズムの進展も同様である。都市住民が農山村に訪れ、憩うための環境づくりの方向として、大規模で、新しい都市型、施設型のアミューズメント性の高いリゾート環境づくりではなく、農村社会が長い時間をかけて育成してきた環境に直接触れ、そこで何かを体験し、感じ、癒されるというソフトなリゾートのあり方が志向されてきている。

農村側も、都市住民をお客として向かい入れるだけでなく、農村の自然や農村景観維持のためのもう一つの重要な担い手として位置づけて、一緒に汗を流してもらいリゾートの可能性を追求しようとしてきている。また、農山村が築いてきた自然と共生した暮らし、自然素材や、農林業素材を活用した、「等身大」の暮らしを都市住民が体験することの意義が理解されつつある。地産地消的な農的暮らしこそ、持続型の循環型社会のモデルとなる。このような暮らしの実体験的な学びの交流が新しい農村リゾートの重要なメニューとなってきている。

このような地産地消型、農的暮らし体験型の手づくりリゾートが展開される農山村の環境は、単なる自然豊かな環境ととらえることはできない。里山に象徴されるように、人間が長い時間をかけて維持し、活用してきた二次的自然環境である。人間が生きるために、その地の自然を活用してきた姿としての風景である。ふるさとの風景は自然が作ったものだけでなく、人間が作ったものであり、その創造の意義を感じる旅となるのが、「里地里山リゾート」といえる。その旅で人と自然との関係をどう持続させるのか、させてきたのかを学び、どう循環的に、自立的に生きるべきかを学ぶ旅となる。

2) 里地里山の意義

2002年の新・生物多様性国家戦略においては、里地里山における二次自然の持つ、生物多様性の重要性が指摘されている。農山村での暮らしのために、身近な自然を長期的に手を加えてきた結果として形成された里地里山は、多様な生物の棲息環境を結果的に維持してきたといえる。このように、環境サイドから里地里山の重要性が改めて強調されてきた。

「里山」ということばの歴史はそれほど古くない。1960年代前半、森林生態学者の四手井網英「村里に近い山と言う意味・・・林学でよく用いる『農用林』を『里山』と呼ぼうと提案した。」のが最初といわれている。一方、農村空間の中には里山の山以外に、水田、畑、水路、集落のたたずまい等があり、これらの空間も生物多様性の場、ニッチとなっている。このことを強調するための言葉として、環境政策サイドで「里地」が造語され、以前の里山を含めて、農村環境を「里地里

山」と表現するようになってきた。都会や奥山を除く農村環境全体を表現することばとなっている。[里山+集落居住地+農地]を含む農林業的な営みで形成された環境であり、二次的自然で構成される領域といえる。1994年の環境基本計画で里地自然地域概念提示がされ、山地自然地域、平地自然地域の中間的領域として位置づけられ、国土面積の約4割が里地里山のエリアであるという。

里地里山の今日的な意義は下記の4点集約できよう。

二次的自然としての里地里山の意義 / 縄文の時代から続く里地里山

手つかずの自然、原生自然ではない自然から構成される。二次的自然と言われる。人間が生きるために、目的意識的に、定期的に攪乱されてきた自然であり、人間が管理・利用して育ててきた自然である。定期的に自然の遷移過程をとどめることが農業であり、その結果として棲息可能な生き物が生存し続けた。この生き物を農業生物という。これら農業生物の棲息環境の場として、里地里山があった。

このように農林業的自然は、我が国では縄文時代以来形成されてきたともいえる。弥生時代以前、水田での水稲栽培以前の縄文時代は単なる採取文化ではなく、自然の栽培化、すなわち、自然の加工、自然の管理・育成をしてきたことが、最近の環境考古学の研究で明らかになりつつある。縄文時代の遺跡で有名な「山内丸山遺跡」での植物種子等の発掘と分析で明らかになったことに、集落周辺での粟栽培を意識的に縄文人がしていたということがある。集落周囲に、粟の実を定期的に収穫するために、植樹していたのである。一種の縄文時代の里山形成であり、育成である。

縄文時代から続いていた居住地周囲の山を暮らしのために、育て、持続的に活用するという里山文化は、その後、弥生時代の水稲文化が輸入されても、水田に必要な水の涵養林、堆肥林としての位置づけられ、水田と一体となった森、農業と一体となった里山文化が発展してきたともいえる。このように、里地里山文化は、縄文時代から続くものであり、日本独自の暮らしの文化景観としての意義を持ち、「世界遺産」的価値のある環境として、風景としての意義を持つといっても過言ではない。里地里山は、縄文の森の農業と弥生の湿地農業の融合領域とした環境としての意義をもつといえる。

集落居住地を中心とした同心円的空間構造・環境構造とその風景

里地里山は[里山-集落-畑-水田-川]が有機的につながった空間を構成している。地形に沿った形で配置され、地形に合わせた形態として独自の風景を構成している。人間居住としての屋敷、集落を中心地として、その周囲に人間の生活、生産行為の頻度にあわせて空間が配置されているという合理的な空間構成をとっている。人間が長い年月を経て、人間が集団に持続的に暮らしつづけるための合理的な土地利用がそこには展開されているともいえる。集落居住地の全面に広がる畑地・水田の風景、生け垣や草屋根の緑の帯、屋敷林とその背後に広がる里山と奥山が織りなすスカイライン等から構成される里地里山の典型的な風景は一種の完成した日本独自の風土に形成されたエコロジカルランドスケープとしての価値を有している。

「共同」によって支えられた里地里山

里地里山環境を維持するために、農村社会には一種の環境管理のための「作法」があった。限られた資源を持続的に、みんなで使用しつづけるためのルールである。またそのルールが適用される空間があった。入会地と呼ばれる里山の一部は、「総有」としてのコモンズの領域として位置づけられ、利用と管理に対する制限と一定の共同労働が求められた。その封建制は課題として残るものの、コモンズを共同で持続的に利用するための知恵に学ぶ点は多くあろう。また、里地里山の環境を維持するための共同作業としての道普請であり、溝さらいであり、山仕事がある。また、共同での田植えや屋根葺きでの「結い」のようなルールがあった。山入りの行事、年間を通じた、四季折々での農作業に係る里地里山での行事は、

個のものではなく、共同のものであり、その共同の場と時間を費やすことで、共同で生きることの意味を感じることができる。

個に分化した近代社会のあり方に対して、土着的に生きるため、共同で環境を維持管理するための「作法」やその共同労働の意義に関して、里地里山は多くのことを我々に教えてくれる。ただ、この地域的コモンズでの管理の継続が厳しい状況にあることは確かであり、これらの里地里山の環境を共同で維持するために、新しい「入会関係」を都市住民と結ぶことが求められているともいえる。その機会として「里地里山ツーリズム」を位置づけることも可能であろう。

精神性と癒しの環境としての里地里山

砂漠の世界のように、人間と自然が対立して存在するのではなく、自然の中で人間が生かされているということを感じ、あるいは、人間が自然に適当に働きかけることで、自然と人間との共生関係が持続していることを感じるのが里地里山環境の中ではできる。東北地方にある「草木塔」の文化には、里山にある草木に対する感謝や畏敬の気持ちであろう。また、「やおよらずの神」のように、人間を取り巻く自然的存在に対するおそれと同時に、自然とともにあることでの一種の安心感、安堵感もそこにはあろう。自然を対置してみるのではなく、自然と人間の二元論でみるのではなく、「自然と人間が不可分」状況の中で、人間の暮らし、一生があることを感じる場とし、里地里山がある。人にやさしい自然、人と融和した自然を感じることで人は癒される。日本の里地里山の自然は、そういう自然であり、そのことが、「里地里山リゾート」に期待されていることではないか。